

てくあく 170号

—キリストと歩:じ—

発行：京都教区カトリック正義と平和協議会
京都市中京区河原町三条上る
TEL075-223-3340
FAX075-223-3371
E-mail:seiheiky@kyoto.catholic.jp

自分史からの東アジアと日本— 朝鮮半島の歴史研究、1980～90年代を中心に

日時：2024年4月20日14:00～

場所：カトリック河原町教会 ヴィリオンホール

講師：太田修さん（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授）

司会：司教のほうからご挨拶いただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

大塚司教：皆さん、こんにちは司教の大塚です。

今日は京都教区正義と平和協議会の学習会にお越し下さりありがとうございます。私たちは長年、正義と平和、差別問題などに取り組んでその歴史的な背景などを学習しながら、現代にまだ残っている問題について考えを深めています。



今日は太田先生をお招きして先生個人のご研究から私たちも、韓国の歴史と日本の関係について学びを深めたいと思います。

ご存知のように、京都教区は韓国のチェジュ教区と姉妹教区を結んでもう来年20年になります、私たちも韓国にたくさんのお友達ができましたし、向こうに行く機会も増えてきましたが、正しい情報をいつも更新しなければならないと思います。

今日もその意味で大変勉強になると思いますし、私もよく学びたいと思います。どうぞ最後までよろしくお願いいたします。

司会：ありがとうございました。

それでは今日の講師の簡単なご紹介をしたいと思います。太田修先生、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の教授でいらっしゃいます。専門は日韓の近現代史ということになります。

今日は自分自身からの「東アジアと日本」ということで、いつもは日韓のいろいろな歴

史的なお話をしてくださるのですが、今日は特にご自身の歴史を話してくださると、どんなお話になるのかということをお楽しみにしております。

ではよろしくお願いたします。

はじめにーさまざまな体験や思考の積み重ね

こんにちは、ご紹介いただいた太田です。私は朝鮮半島の近代・現代の歴史、日本と朝鮮半島の関係の歴史を勉強しています。特に、植民地支配や冷戦、民主化、在日コリアンの歴史などに関心をもっています。

今日皆さんにお配りしているレジュメのタイトルは「東アジアと日本」となっていますが、この間作業をしながら「自分史からの」をつけた方がよいと思い、パワーポイントのタイトルは「自分史からの東アジアと日本」としています。ご了解ください。

では「自分史」において、なぜ朝鮮半島の歴史を勉強することになったのかということですが、率直に言いますと、何か決定的な一つのきっかけがあったというよりは、このあとお話ししますが、さまざまな体験や考え、思いなどが積み重なった結果だということです。

今日お話しする内容は、「1. 高校時代まで（～1982）」、「2. 大学時代（1982～1986）」、「3. 大学卒業から留学まで（1986～1989）」、「4. ソウル留学（1989～2001）」です。最後の「4. ソウル留学」については、時間の関係上、あまりお話しできないかもしれませんが、おもに高校からソウル留学までのこと、年代で言いますと、1980年代から90年代初めまでを中心にお話しする予定です。私の個人的な体験と思考の積み重ね、つまり自分史をお話しすることになりますので、やや恥ずかしくもありますし、自分史から本当に「東アジアと日本」が見えてくるのかという疑問もあります。

それはともかく、今日おもに使う資料は、私の日記や写真、韓国の友人との書簡のほか、正義と平和協議会も『てくてく』という会報を出しておられますが、私がかかわっていた組織が発行していた会報に書いた未公開の文章など、現在、私が持っている個人記録ですね、最近それをエゴドキュメント（ego-document）と言ったりしますが、今日はそうしたエゴドキュメントを使ってお話ししようと思います。

実は、自分史について公の場でお話しするのは初めてのことです。だからどうだというわけではないのですが、私が持っている個人記録をあらためて読むことができました。そこにはいろいろと発見やある種の驚きがあったり、一方で恥ずかしさや後悔、反省があったりしました。全体として、自分を見つめ、内観するよい機会となりました。そうした機会を与えてくださったことに感謝いたします。

その一方で、今日この場に参加されている皆さまにとって、私の自分史は、特殊な個人の話で、いわば他人事なわけですから、ほとんど無意味なことだとも言えます。

とはいえ私も、1980年代、90年代という時代を生きていましたし、日本や韓国の社会の中で行動したり考えたりしてましたので、おそらく今日来ておられる皆さまと共有できる部分もあるのではないかと思います。また、そういう特殊な自分史から日本と朝鮮半島あるいは東アジアとの間の関係性や課題みたいなものも見えてくるのかもしれない、と楽観的に考えることにします。

ともかく、少しでも皆さんの助けになればとの思いから「自分史からの東アジアと日本」についてお話しします。



1. 高校まで（～1982）

（1）京阪神や中国大陸、シルクロードへの憧憬 朝鮮半島はすっぱり抜け落ちていた

私が生まれ育ったのは兵庫県北西部の山村です。自治体名でいうと、新温泉町というところ。かつては温泉町でしたが、2005年に浜坂町と合併して現在の名称となりました。

新温泉町にはその名の通り、湯村温泉という温泉があります。同じ兵庫県北部でも城崎温泉は有名ですが、湯村温泉を知る人は少ないでしょう。1980年代の初めに吉永小百合さんが主演されたドラマ「夢千代日記」の舞台となり、少しは知られるようになったのかもしれませんが。ただ私が生まれ育ったのは、そこから車で15分ほど山奥に入った20数軒ほどの集落です。



この写真は先月（2024年3月）帰省した時に撮ったものです。風光明媚なのですが、東西に中国山地の山が迫っていて、その谷間に5つの集落が散在しています。いずれもいわゆる「限界集落」で、あと20年もすれば消滅するのではと心配になります。この地域が特殊だというよりは、おそらく日本中どこにでも見られる風景なのかもしれません。

幼少期から、京阪神など都市への文化的な憧れがありました。それは、お盆に帰省する叔母や叔父が持参するお土産や、その語りから感じたものでした。

それに、中学校だったと思いますが、国語の教科書に掲載された魯迅の作品や1980年に放送されたNHK特集「シルクロード」で、大陸への憧れが加わります。集落から北方に広がる日本海、そしてその向こうに広がる大陸に、明るさやまぶしさを感じていました。ただ、その明るさやまぶしさの感覚は、アジアに対するものというよりは、シルクロードや大陸のずっと先にはヨーロッパが存在するというので、結局、近代ヨーロッパの文物に対するものだったのでしょうか。朝鮮半島のことはほとんど意識していなかった。というか、すっぱり抜け落ちていたんですね。

山陰線鉄道工事と朝鮮人労働者

ところが、近代史の中には、兵庫県北西部と朝鮮半島との関係はたしかにあったのです。たいへん恥ずかしいことですが、2000年代に大学で朝鮮半島の歴史を教えるようになって、兵庫県北部を通る山陰本線の鉄道工事に朝鮮人労働者が従事していたことを初めて知ることになります。

山陰本線は京都から山口県まで日本海側を通っていきまして、兵庫県北部の鉄道工事は1907年から11年にかけて行われます。なかでも山陰本線で最も長い桃観トンネルと、それを抜けたところにある、当時、東洋一と言われた余部鉄橋（現在は鉄筋コンクリート）は難工事でした。このトンネルと鉄橋の完成で京都から出雲までの鉄道が開通するのですが、この二つの工事に朝鮮人労働者が動員されていたのです。1910年の「韓国併合条約」によって日本の朝鮮植民地支配が開始された頃のことです。

桃観トンネルの近くには、二つの工事で犠牲になった労働者を追悼する石碑があります。1911年に建てられたその碑文によると、犠牲者27人のうち7人が朝鮮人労働者で、その7人の朝鮮人の名前も追悼碑に刻まれています。また、どういいうわけか、余部鉄橋の近くの墓地に7名のうちの1人の朝鮮人労働者のお墓が今も建っています。誰が、なぜ、どのように建



てたのかよくわからないのですが、墓地の所有者が維持管理しておられます。以上の話は『朝鮮近現代史を歩く』（思文閣出版、2009年）に書きましたので、ご参照ください。

ともかく実際には、身近なところに朝鮮半島とのつながりがあったのですが、私が気づかなかった、何も知らなかったということです。

(2) 光州事件 (1980) の記憶

在日朝鮮人のクラスメイト

新温泉町の中学を卒業した後、兵庫県三田市にある高校に入学しました。三田市は六甲山の北部にある小都市です。自宅からは通学できませんので、高校の敷地内にあった寮に入りました。

この高校で、朝鮮半島の歴史と出逢うことになります。どのようないきさつからかよく覚えていないのですが、あるクラスメイトのバイクの運転免許証を見せてもらう機会がありました。それほど驚いたわけではないのですが、そこには「朝鮮」と書かれていたことを覚えています。ただその時は、どうして「朝鮮」なんだろうと若干の「違和感」のようなものを感じたぐらいで、深くは考えませんでした。

あとでお話ししますが、大学時代に京都の市民グループ「鳳仙花の会」に参加し在日コリアンの歴史を勉強することになって、あの時のクラスメイトは在日コリアンだったんだと気づくことになります。

高2の春、寄宿舎の食堂で見た映像

もう一つ、朝鮮半島の歴史に関わるエピソードです。少し前にお話ししたとおり、高校は寄宿舎生活をしておりました。高校2年生の時、1980年の春のことでした。クラブ活動が終わり友人と寮の食堂で晩ご飯を食べながらテレビを見てみると、同世代の若者が軍人に連行されていく映像が映し出されていました。ニュースだったのか、特別番組だったのか、思い出せませんが、自分と同年代の若者が、なぜ軍人たちに後ろ手に縛られ暴行を受け、銃を突き付けられているのか疑問に思うと同時に、たいへんな恐怖感を感じたことを覚えています。

それは1980年5月に韓国で起こった光州事件の様子を映し出す映像でした。1979年の朴正熙（パク・チョンヒ）大統領暗殺事件後に訪れた「ソウルの春」という民主化運動が再開された際に、全斗煥（チョン・ドゥファン）ら軍人による戒厳令の拡大措置に抗議する光州市の学生や市民に対して、空挺部隊が残虐の限りを尽くしたため、抗議のデモは全羅南道一帯に広がり、約10日間にわたって軍の暴力に抗議し民主化を求めた事件でした。

戒厳令によって、後に大統領になる金大中が全羅南道の木浦出身だったため、その中心都市である光州に空挺部隊を投入して抵抗運動を弾圧したのです。あくまでも学生や労働者、市民が軍の暴力に抵抗したという意味で、韓国では光州民主抗争と呼ばれることがあります。単なる「事件」ではなく、「抗争」だったということです。

光州は、5月18日から27日までは市民による「解放区」となるのですが、さらなる軍隊の投入によって弾圧をされ、多くの犠牲者が出ました。光州広域市の発表（2009年）では、抗争期間の死亡者が163人、行方不明者166人だということですが、民間調査ではさらに多くの犠牲者があったという説もあり、「抗争」の真相は未解明な部分が多いとされています。

当時高校2年生の私はそれが何を意味するのかよくわかりませんでした。ある程度理解できるようになったのは大学入学後のことで、やはり「鳳仙花の会」という市民グループに参加してからのことです。

2. 大学時代 (1982~86) - 「鳳仙花の会」、最初の訪韓

(1) 「鳳仙花の会」 (1980~88)

1982年に同志社大学に入学します。私が入学する前のことですが、光州事件後に、同じ学科の先輩（後に作家・黒川創となる、代表作に『鶴見俊輔伝』、『きれいな風貌』）と彼が所属していたゼミ生が中心になって光州の市民に連帯する集会を大学で開催します。

その後、その先輩が中心になって、喫茶店「ほんやら洞」で出会った市民をまきこんで市民グループ「鳳仙花の会」を立ちあげ、毎年5月に「京都から光州へ／はじけ、鳳仙花」という集会を開催します。私は1982年の夏頃から参加することになります。

活動の拠点は「ほんやら洞」でした。「ほんやら洞」は、出町と呼ばれる地域、今出川通寺町西入る北側にあったのですが、2015年の火災で焼失してしまいました。もともと京都べ平連（1960年代の半ばに小田実さんや鶴見俊輔さんたちが立ち上げたベトナム反戦運動の組織「ベトナムに平和を！市民連合」の略称）にかかわっていた人々が1972年に開店したそうです。

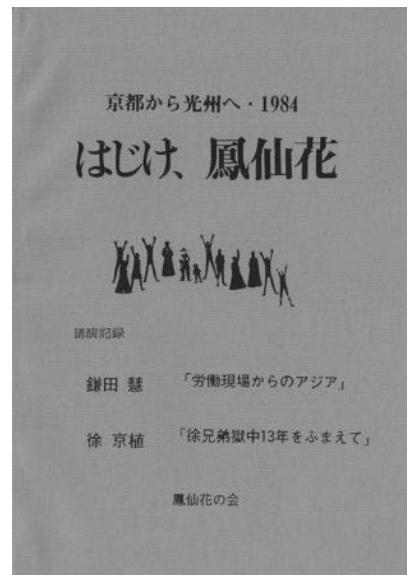
私がよく行っていた1980年代の「ほんやら洞」は、飲み物や軽食だけでなく、「シゲのパン」やカレーが有名で、日替わりのランチやディナーが食べられ、よくボブマーリーなどのレゲエがかかっていた。何といても他の喫茶店やカフェと異なっていたのは、2階には、コーヒー一杯で1日中過ごせるフリースペースがあったことです。壁の本棚には70年代から集められた本がぎっしりあって、文字通り老若男女が本を読んだり、会話したり、それぞれ思い思いのことをやっていました。語学の勉強会や、会議、ちょっとした講演会、音楽会などが開かれる、出合いの、交流の空間でした。

「鳳仙花の会」も、このフリースペースをよく利用しました。会の中心メンバーは在日朝鮮人と日本人5~6人でした。毎年5月の「京都から光州へ／はじけ、鳳仙花」という集会和毎月1回の定例学習会がメインの活動で、集会を準備する会議や定例学習会も「ほんやら洞」で行っていました。

まずは集会ですが、この冊子は1984年に開催された集会の講演録で、講演者はルポライターの鎌田慧さんと作家の徐京植（ソ・ギョンシク）さんでした。トヨタの自動車工場での労働現場をルポした『自動車絶望工場』を書かれたことで著名な鎌田さんには、「労働現場からのアジア」というテーマで話していただきました。

それから徐京植さん、去年亡くなられましたが、徐勝（ソ・スン）・徐俊植（ソ・ジュンシク）兄弟事件として知られる徐兄弟の弟さんですね。徐兄弟は、韓国留学中の1970年代初めに「在日同胞留学生スパイ事件」として韓国当局に国家保安法違反の容疑で検挙され、長いあいだ獄中で闘い続け1989年に釈放されるのですが、徐京植さんはお兄さんたちの闘いを支え続け、徐京植編訳『徐兄弟 獄中からの手紙』を出されたことで知られていました。徐さんには「徐兄弟獄中13年をふまえて」という内容の話をしていただきました。

そして隣の写真は、1985年5月に開催された「京都から光州へ・1985／はじけ、鳳仙花」のチラシです。このときは、歴史家の和田春樹さんに「80年代の韓国—光州からの出発」というテーマで話していただきました。この時、映画「光州の告白」も上映しました。



1984年に開催された集会の講演録

毎月の定例学習会では、総合雑誌『世界』をテキストとして使うことが多かったです。たとえば1984年8月号では、特集「日本にとって朝鮮問題とは何か」が組まれていました。

『世界』には、毎月T・K生「韓国からの通信」が掲載され、よくテキストとして読んでいました。この時は「それでも希望を歌う」というタイトルでした。T・K生は宗教哲学者・池明観(チ・ミョングァン)さんだったことを2003年にご自身が明らかにされますね。池明観さんは2022年に他界されました。

また、当時学習会で読んだのは、和田春樹さんが1982年に出された『韓国からの問いかけ』(思想の科学社)、韓国のジャーナリストであり社会評論家の李泳禧(イ・ヨンヒ)さんが書かれた『分断民族の苦悩』(御茶の水書房、1985)などの書籍や、徐兄弟救援運動、韓国民主化運動、在日朝鮮人の歴史に関わる資料などでした。

私は、そうした集会や学習会で、初めて知ったり、考えさせられたりしました。とりわけ在日朝鮮人のメンバーがいましたので、彼らの経験や思いなども聞いたりして、在日朝鮮人のこと、在日朝鮮人の歴史も少しずつ理解できるようになっていきました。



1985年5月に開催された集会のチラシ

(2) 梁民基先生、朝鮮語学習

梁民基先生との出会い、「マダン劇」

毎年の「京都から光州へ／はじけ、鳳仙花」では、韓国民衆演劇「マダン劇」や「歌と詩の構成」も上演しました。在日二世の梁民基先生が主導した企画でした。マダン劇というのは韓国の民衆演劇で、「マダン」は広場という意味です。通常西洋演劇では俳優が舞台上で演じ、舞台と観客席とは区分されていますが、マダン劇では、役者が円形の広場で演じて、観客はその周りをぐるりと囲んで見る、時として演じ手と観客との境界が曖昧になり、観客が演劇に介入していくことが頻繁に起こるのです。つまり観客である民衆が演劇自体を作り上げていく演劇なんです。1970年代から80年代の韓国民主化運動の中では、そうしたマダン劇がさかんに上演され、あらゆる権力が批判されました。マダン劇は、歌、美術などととも民衆文化運動として展開されていきます。

このマダン劇を初めて日本に紹介したのが梁民基(ヤン・ミンギ)先生でした。梁先生は1981年に編訳書『仮面劇とマダン劇』(晶文社)を出してマダン劇の論文や台本を翻訳、紹介しただけでなく、大阪や京都で、自ら台本を書き、演出し、マダン劇運動を実践していました。「鳳仙花の会」の集会でマダン劇をやろうということで、梁先生が書いた台本をもとに私たちが演じたりしていました。梁先生は、マダン劇や詩や歌などの文化運動に希望を見出していたのだと思います。こうして梁民基先生と出会ったのですが、私は先生から非常に多くの影響を受けることになります。

「ほんやら洞」と京大での朝鮮語学習(1983~88)

私は大学2年生の時、1983年4月からですが、「ほんやら洞」2階のフリースペースで梁民基先生が教えておられた朝鮮語講座に参加します。「鳳仙花の会」の活動にかかわり、朝鮮半島のことを勉強するようになりましたので、その基礎となる朝鮮語を勉強したいと思ったからです。今日では、朝鮮語の授業はどこの大学でも第二外国語として開設されていますけれども、当時、大阪外国語大学や天理大学以外では、朝鮮語の授業はなかったの

です。同志社大学も同様でした。

「ほんやら洞」の朝鮮語講座で6ヶ月間入門編を勉強した後、やはり梁民基先生が教えておられた、京都大学の朝鮮語自主講座で中級編を勉強することになります。1970年代半ばに始まった京大朝鮮語自主講座は、梁先生と学生によって運営される自主講座で、私が参加した当時は、たしか受講生一人当たり月謝500円だったと記憶していますが、梁先生には事実上のボランティアだったと言えます。

毎週1回の授業は、梁先生が学生側の希望を受けて選定した小説やエッセイを講読していくもので、一人10行くらいの文章を辞書で調べていき、それを読んで翻訳するという具合でした。大体1時間ほどで終わり、その後はきまって飲みに行って、そこで梁先生による、韓国の文学、マダン劇、歌運動など民衆文化運動についての本格的な「授業」が始まりました。

そういう雰囲気の中で、梁先生とメンバーで韓国の民衆歌謡に関する論文と歌を収集し、翻訳、出版することになり、『韓国の民衆歌謡』という本を1988年に刊行します。当時の韓国民主化運動の中で、学生街や労働現場、デモの現場で盛んに歌われていた、アンダーグラウンド文化としての歌でした。「アチミスル（朝露）」とか「工場のともしび」、「ニムのための行進曲」、「五月の歌」などですね。今日の日本の若者にはK-POPが人気ですが、「民衆歌謡」こそが最初の韓流だと私は勝手に思っています。今でも歌える歌もあるし、もう忘れてしまった歌もあるのですが、とにかく当時はすごく惹かれていました。また、『韓国の民族・民衆美術』という本も翻訳、出版しました。



「原爆映画を上映する会」

そんな中、1984年9月に初めて韓国を訪れることになります。

当時、大学では「ラテンアメリカ研究会」（後に「現代史研究会」と、「原爆映画を上映する会」というサークルに入っていたのですが、前者の活動にはあまり熱心ではなく、後者の活動に力を入れていました。

1980年代の初め、米ソの核軍拡競争に対する抵抗運動として、世界的に反核運動が盛り上がっていました。日本ではその運動の一環として、アメリカ国立公文書館に所蔵されている原爆関連フィルムを上映する10フィート運動が展開されていました。原爆投下直後の広島と長崎に米軍の調査団が入り、たくさん映像を撮影するのですが、その時の映像フィルムや写真がアメリカのワシントンDCにある国立公文書館に所蔵されていて、それを日本の市民が一人10フィート（約3m）を3000円ずつで購入し、そのフィルムで映画を作って上映活動をすることによって、被爆の実相を伝え、二度と核兵器を作らせない、使わせない意思を示していこうという運動です。

同志社大学でもそういう運動をやろうということで、「原爆映画を上映する会」が1982年に結成されました。

(3) 初めての訪韓

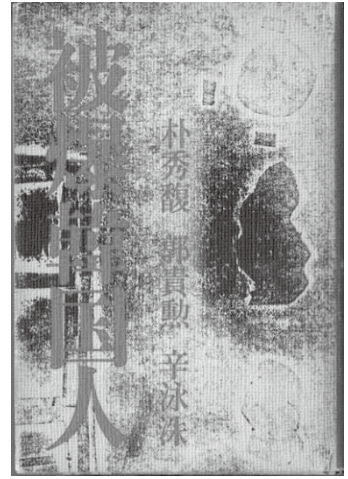
1984年、9月、在韓被爆者の黄応儿さん、金仁祚さんを訪ねる

「原爆映画を上映する会」で学習会や活動をしていく中で、韓国にも被爆者が存在することを知ります。植民地支配下に広島、長崎にやってきて在日朝鮮人として生活していた人たちや、1930年代末から労働者として、軍人・軍属として強制動員されていた人たちも被爆したのです。その被爆者たちが植民地支配から解放された後に朝鮮半島に帰って、韓

国にも北朝鮮にも被爆者がいることに気づかされます。

当時、朝鮮人被爆者の歴史が書かれた本が何冊か出されていましたが、なかでも『被爆韓国人』（朝日新聞社、1975年）がよく整理されていると思いました。これがその本です。その中に在韓被爆者の黄応八（ファン・ウンパル）さんの体験記が強い印象を与えました。手記には黄応八さんの韓国釜山の住所が載っていたので、黄応八さんの話を聞きに行こうと思いましたが、さっそく手紙を書き、返信があったのだと思います。

こうして、1984年9月に初めて韓国を訪れることとなります。釜山に到着して、ずいぶん迷ったのですが、黄応八さんの自宅を訪ねることができました。近所に住んでいた被爆者の金仁祚（キム・インジョ）さんも来ました。『被爆韓国人』には、金さんの体験記も掲載されていました。



在韓被爆者の歴史と思いを知る

「原爆映画を上映する会」は、サークル誌『反核通信 紙ひこうき』を発行していたのですが、そこに9回にわたって「在韓被爆者現地レポート」を連載しました。今読み返してみると、たいへん稚拙な文章です。

緊張していたのだけれど、黄応八さんがとても穏やかな方で、自宅でサムギョプサル（豚肉の三枚肉を焼き野菜に包んで食べる料理）と焼酎をごちそうくださり、緊張もとけていったことなどを書きました。

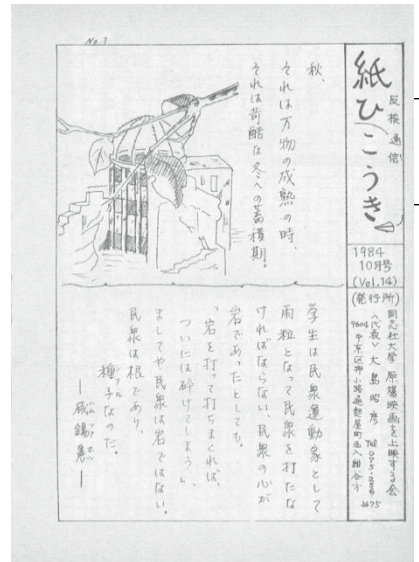
レポートの内容をすべて紹介できませんので、レポートの最後の部分を紹介しておきます。詩人・栗原貞子さんの「ヒロシマというとき」という詩を引用して、少し恥ずかしいのですが、次のように書きました。

ぼくは、三年前にこの詩を知った。その詩は、日本人の過去の加害性、いや、現在も脈々と続いている日本人の加害性をしっかり認識したうえでヒロシマを語る必要性を教えてくれた。／そしてもう一度黄さんの言葉が浮かんでくる。／「私には残された時間が少ないのですが、事実だけは後世に伝えたいのです。」／事実とは在韓被爆者の歩んだ歴史である。

当時の私としては、日本人の被爆や被害のみが強調されていて、たしかにそれらを訴えることは正当なことなのですが、黄応八さんや金仁祚さんの被爆体験やその後の人生にふれて、植民地支配下で広島、長崎に動員されてそこで被爆をし、韓国に帰ってから差別を受け、日本の被爆者援護施策からは排除された人たちの歴史や思いも知る必要があるんじゃないかと強く思うようになったのです。

黄応八さんの創氏改名

『被爆韓国人』の黄応八さんの被爆体験記には、被爆当時「檜山」を名乗っていたと書かれています。大学時代に初めてこの文章を読んだときは、「檜山」は黄さんの日本名だという程度で理解していたのですが、今回あらためて読み返してみて、気になったのです。創氏改名について、朝鮮史の豆知識としてお話しておこうと思います。



『反核通信 紙ひこうき』Vol.14,1984.10

広辞苑によると、創氏改名は「日本式の姓名への改名を強制した政策」だと説明されていますが、「日本式の姓名への改名」というのは誤っていると言わざるを得ません。

1939年の11月に朝鮮民事令という法令が改定されて創氏改名を行うことが決定され、翌1940年2月に施行されます。創氏改名の創氏とは、文字通り、「氏」を創るということです。ですので創氏は全朝鮮人に法的に強制されたものでした。「改名」は、名前を改めるということで、任意でした。水野直樹さんが出された岩波新書『創氏改名』(2008)に詳しいことがかかれていますので、参考になさってください。

朝鮮人の「姓」は、男系血族集団を識別する名称だと言えますが、それを「氏」、つまり日本の家という親族集団の名称に変えるのが創氏です。戸主が一家の「氏」を設定して申請したのは、8月までに全戸数の約80パーセントでした。

例えば、金さんという男性が朴さんという女性と結婚した場合、朴さんの「姓」はそのまます。その子どもは男系血族集団の「姓」を継承しますので、金さんになります。その金さんが李さんという女性と結婚しても李さんはそのままです。このように朝鮮の家族内では、いくつかの「姓」が混在した状態なのです。

それで金さんの家族が、たとえば日本的な姓「金山」に創氏したとすると、家族全員が「金山」になります。こうして約80パーセントの戸数が日本的な姓を届出て創氏したのですが、届出なかった約20パーセントはどうなるかという、たとえば男系血族集団の「姓」に統一されます。たとえば「金」であれば、家族全員が「金」になります。これも創氏です。

先に紹介したように、改名は任意でしたが、日本的な名前に改めたのは朝鮮人人口の約10パーセントだったそうです。

整理すると、創氏改名の目的は、朝鮮の家族制度のあり方を、日本の家族制度、つまり、天皇を頂点とする国家が家を通じて個人を統治する家制度に組みこみ、朝鮮社会のあり方そのものを変えることにあったということです。戦時体制が深まっていくなかで、日本の国家が朝鮮人を兵士や労働者として動員する必要性に迫られていたからだと言われています。

これまで創氏改名は、植民地支配下の同化主義的な性格を象徴する政策としてとらえられてきたのですが、水野さんの研究では同化と差異化の側面を同時に持つ政策だったといえます。創氏で同化を進める一方で、名前においては差異を残して差別する。総力戦体制下で内鮮一体が強調された1940年代になっても支配当局は差別をなくそうとはしなかったということです。黄応八さんの創氏改名も、そうした同化と差異化において理解する必要があると、あらためて思いました。

また水野さんは、「在日韓国・朝鮮人の多くが現在も日本的な通称名(通名)を使っているのは、日本社会に根強い差別が残っているからであるが、創氏改名のもたらした傷跡のひとつである」とも言っています。創氏改名は、今日の在日コリアンの名前のあり方にも影響を及ぼしているということですね。

ソウルの友人との文通、学生たちのブ・ナロード運動、留学への思い

釜山で黄応八さんと金仁祚さんにお別れした後、慶州、光州、大邱などを経て、ソウルに行きます。そこで延世大学の学生Kさんと知り合い、約5年間にわたって文通をすることになります。先日、今日の話の準備のために、それらの手紙を並べて撮った写真です。100通ほどですので、1ヶ月に2回ほど手紙を交換していたことになります。

そのKさんの手紙から、民主化運動の状況や学生生活について知るようになります。その中で印象に残っていることを一つお話しします。

学生たちのブ・ナロード運動についてです。ブ・ナロードというのは「人民の中へ」を意味するロシア語です。19世紀後半のロシアで、ツァーリズム支配を倒して社会主義運動を広げるため、都市の知識人ナロードニキらが農村に入って農民を啓蒙し革命思想を広めようとした運動でした。このブ・ナロード運動が1980年代の韓国でも起こったのです。

韓国の場合は、大学生たちがおもに労働現場に入行って、労働者を組織して革命を起こそうということだったようです。Kさんが属していた学科の約3分の1の学生が労働現場に入ったそうです。

ところがそう簡単にはいかないのが歴史の常で、学生たちは、当局から睨まれて監視の対象となり、検査されたり、場合によっては投獄されたりします。おもに日本経由で入手した社会主義文献を読み、労働現場に入って労働者を組織しようとするのですが、なかなかうまくいかない。学生たちは裕福な家庭に育ったエリートで、貧しい生活を強いられた大学に行く余裕のなかった労働者とのあいだには、葛藤が生じるわけです。また学生たちには、どうしても工場労働者や肉体労働者にはなり切れないエリート意識がある。結局、Kさんたちもブ・ナロード運動を諦めて1年後に復学することになります。

Kさんの手紙に、韓国の学生たちの生活や、民主化運動の光と影の部分もかいま見たりしながら、私も韓国に行ってみたい、留学して勉強してみたいという思いがつのっていききました。



Kさんから来た手紙(1984~88)

3. 大学卒業から留学まで (1986~1989) - 「ハンマダン」、1987民主化

(1) 東九条、多様な歴史や文化の共存

「ハンマダン」結成 (1986)

1986年3月に大学を卒業しますが、就職活動はしませんでした。高校で非常勤講師をしたり、塾で教えたり、在日朝鮮人が集住する地域・東九条の飯場で日雇の仕事をしたりしていました。留学したいという思いがあったためなのですが、はっきり決めていたわけではなく、やや不安定な生活でした。

とはいえ1986年は私には重要な年となります。先ほど紹介した梁民基(ヤン・ミンギ)先生の呼びかけで、東九条で「民族民衆文化牌ハンマダン」という文化運動グループが結成されます。京大朝鮮語自主講座や日韓連帯運動、東九条の住民運動にかかわっていた青年たちが参加しました。当時、京大朝鮮語自主講座で朝鮮語を学んでいた私も梁先生に声をかけられて参加しました。

その趣旨文によると、ハンマダン結成の目的は「民族固有の伝統文化を、その精神と内容・形式の面から継承し、在日同胞の真に主体的な文化創造をめざす」ことでした。このように「ハンマダン」は「在日同胞の真に主体的な文化創造をめざす」文化運動組織だったのですが、日本人も参加していました。この点については、後ほどお話しします。

「ハンマダン」の活動は、梁先生が台本や企画案を作成し、それをメンバーみんなで議論して、マダン劇やサムルノリ(朝鮮の伝統的な4つの楽器による演奏)、歌と詩の構成などを上演するというものでした。1986年11月に結成公演が行われ、歌と詩の構成「緑豆の歌」とマダン劇「豚ブリ」が上演されました。



マダン劇「アグ」の一場面(1987.11)

この写真は、翌1987年11月に部落解放センターで行われたマダン劇公演「アグ」の時の写真です。「アグ」は魚の鮫鱈(あんこう)を意味し、韓国のマダン劇では正義を象徴する存在です。このマダン劇には私も某下着メーカーの社長役で出演しました。その社長が韓国に行つて妓生観光しているところに、労働者の分身であるアグが現れて社長をやっつけ退散させる、というあらすじです。勧善懲悪な展開なのですが、日本の経済侵略と労働者の搾取を告発するマダン劇でした。

ちょうどその2年後には日本のスミダ電機が韓国の子会社の労働者を解雇したことに対

して、4人の女性労働者が来日して解雇撤回を訴える闘いがありました。

その他にも、「東九条・君が代日の丸に反対する住民集会」で「君が歌わないなら僕も歌わない」(1987.3)、外国人登録法改正反対の創作マダン劇「ソソカラック」(1987.3)、東九条地域の地上げ問題を取り上げた創作マダン劇「タンプリ」(1990.5)などが、公民館、保育園、東九条40番地(鴨川の土手に形成されたスラム)の夏祭りなどの現場で公演されました。

「ハンマダン」の活動を背景に、1993年10月に「東九条マダン」が開催されます。在日コリアンが集住する東九条で最初の本格的な「マダン」、つまり地域住民の手による地域のお祭りといったところでしょうか。この時、私は韓国に留学していたのですが、会場となった陶化中学校の校庭にはのべ約2000人が参加したそうです。

「東九条マダン」はその後も毎年開催され、今では約5000人が参加する地域のお祭りとなっています。今年の秋も32回目のマダンが開催される予定です。

日本人参加問題

「ハンマダン」に話をもどしましょう。結成当初は、在日朝鮮人が8人で、日本人が5人でした。1980年代には、大阪には「マダン劇の会」、東京にも「ハヌリ」(一つの私たち)という文化運動組織があったのですが、両方とも在日コリアンだけで構成されていました。ところが京都の「ハンマダン」は在日コリアンと日本人で構成されていて異例でした。この日本人参加をめぐる議論が起こりました。

1986年11月の「ハンマダン」結成公演直後のことでした。当時の私の日記からの引用ですが、在日のメンバーのSさんが練習後の飲み会の場で「在日朝鮮人だけでやるべきだった」と話し始めたのです。

「なぜ日本人と一緒にやるのか、私にはよくわからない。私らが在日朝鮮人として生まれて、計り知れない屈辱と差別を受け、どれほど苦しんできたか、そしてやっと本名を名乗れるようになり、こうして民族的なものをつかみかけるところまで来た。それをどうして日本人といっしょにやるのか。…今まで生きてきた私の歴史がわかるのか」(1986.11.11日記)。

このように言われたことが私には衝撃で、その言葉が突き刺さってきました。それで在日朝鮮人の歴史をちゃんと学ぼう、学びたいという思いが強まっていったように思います。結局、その後もいっしょにやっていたのですが、朝鮮半島や在日コリアンの歴史を知らなかった自分が恥ずかしく反省する日々が続きます。その体験がその後の朝鮮史の勉強につながっていったのではないかと思います。

「ハンマダン」の活動は、異なる歴史や文化、考え方を持つ人たちが何かひとつのものを表現していくための実験だったと言えます。近年、東九条には、日本人や在日コリアンだけでなく、沖縄や韓国、中国、フィリピン、インドネシア、ベトナム、メキシコ、ボリビアなどの国や地域からの移住民が住んでおられます。今日も「東九条マダン」が続いているというのは、そうした多様な歴史や文化をもつ人々がともに生きているという状況を映し出しているのではないかと、思っています。

(2) 1987年韓国民主化

東アジアから東欧へ、民主化の世界的連鎖

1987年は、韓国の政治的民主化がなった年でした。その前年86年にはフィリピンで、20年以上続いたマルコス独裁政権が倒されるピープルパワー革命が起きました。暗殺された夫の遺志を継いだコランソン・アキノが大統領に就任しました。

私はフィリピンの情勢に関心を持って見ていました。ネグロスキャンペーン委員会主催の集会で、フィリピンで文化教育活動にかかわっていた歌手デッサ・ケサダさんの歌とスピーチを聞いたときのことが、当時の日記に記されています。「我々日本人がしなければならないことは、フィリピンの民衆の声に真摯に耳を傾けることではないか」(1986.5.14日記)。

フィリピン中部のネグロス島では、サトウキビのプランテーション農業が行われていたのですが、「ネグロスの飢餓、貧困に加害者としての日本人がどのようにかかわっているのか…迫することではないのか。フィリピンの民衆ははっきりと『日本帝国主義』と言っているのだ。それをフィリピンに行かせないようにストップすること、その後にはじめて『連帯』という言葉を使うことが可能になる」(1986.5.14日記)。

歯の浮くような言葉で書いているのですが、フィリピンのピープル革命を目の当たりにして、韓国に対しても同様のことが言えるのではないかと、思っていました。

翌87年5月から6月にかけて韓国では、「独裁打倒」、「大統領直接選挙制改憲」を訴える民主化要求デモが全土に拡大していました。6月26日には、全斗煥大統領の後継者に指名された盧泰愚(ノ・テウ)が、大統領直接選挙制改憲、人権侵害の是正、金大中ら政治犯の赦免・復権、大学自律化と教育自治の実施など8項目の「6・29民主化宣言」を発表しました。ひとまず政治的民主化が達成されたのです。

この時、私はどのように考えていたのでしょうか。以下は、Kさんからの手紙を引用しながら書いた1987年7月4日付の日記のくぐりです。

「この1ヶ月間テレビの前に釘付けでした。あなたの手紙には、『最近の韓国の雰囲気は急変し不安です。…熱い6月の陽光が弱まる前に我々の願いが叶えられなければなりません』とあります。韓国の緊迫した状況が強く伝わってきます。情報が限られているせいでしょうか。それとも日本というぬるま湯につかっているせいでしょうか。不安よりも、期待、希望、解放的な雰囲気が、より多く伝わってきます。フィリピンでもそうでしたが、何よりも民衆が歴史を動かす主体であるという実感がはっきりと伝わってきます」(1987.7.4日記)。

ちょうど同じ年には台湾でも民主化が進みますし、中国でもその2年後の1989年6月には天安門事件が起きました。この天安門事件も真相が明らかにされていませんが、多くの人が亡くなったことは事実です。そして、そうした東アジアでの民主化の波が、東欧の民主革命に連鎖していく、そういう状況でした。ですので、1980年代の後半は、世界的に民主化の連鎖が起こった時代だったと言えます。

留学を決心、韓国民主化と日本の植民地支配責任

韓国留学までに3度ほど韓国を訪れました。留学したいという思いがしだいに強まり、やがて決心が変わっていきます。

これも日記からの引用ですが、『光州の5月』は、8年後の現在も朝鮮半島全土に広がっている。…19世紀半ば以降、朝鮮人と日本人の間にはとうてい越えられない溝がで



1988年3月、光州旧望月洞墓地で

きてしまった。僕にとっての『5月の光州』とは、朝鮮人と日本人の間にある深くて広い溝を埋めること、そして本当の友情を築くことではないか。それを実現するには、非常な努力が必要だろう」(1987.5.17日記)と書いています。

これは、1988年の3月に光州民主化抗争の犠牲者たちが埋葬されている望月洞墓地を訪れた時に撮った写真です。私の左側には、前年1987年の6月民主化運動で亡くなった延世大生・李韓烈さんの墓があります。

韓国の民主化を学ぶ中で、私自身は日本の植民地支配責任を考えることが重要だと思うようになっていきます。

4. ソウル留学(1989.9~2001.3) — 日韓会談研究、戦後補償、日韓連帯

(1) 朝鮮史研究を始める

世界的に民主化の連鎖が進む中、1989年9月に韓国に留学しました。半年間延世大学の語学堂で韓国語を勉強し、翌90年3月には高麗大学の大学院韓国史学科に入学します。指導教授は姜萬吉(カン・マンギル)先生でした。『分断時代の歴史認識』(1978)、『朝鮮民族革命党と統一戦線』(1991)、『書き直し韓国近代史』・『書き直し韓国現代史』(1994)、などで知られる韓国近現代史研究者です。金大中政権下では、政府傘下に設置された「親日反民族行為真相糾明委員会」の委員長もつとめられました。残念ながら先生は去年2023年に亡くなりました。

私の大学院での研究テーマは、日韓国交正常化交渉(日韓会談)史研究でした。1945年に日本の植民支配が終わり、48年に大韓民国(韓国)と朝鮮民主主義人民共和国が成立します。日本と分断国家の一つの韓国が国交正常化をするための交渉が1951年から65年にかけておこなわれます。その日韓会談の結果、1965年に日韓条約が結ばれて日本と韓国は国交正常化します。

日韓条約は、今日も生きていて、私が留学していた当時の日本と韓国の関係を規定している、そのためその歴史を勉強する必要があると考えました。日本と朝鮮の人々が植民地支配・戦争をどう考え、向き合ったのか、そのことを究明するということが私の研究課題となったわけです。

こうして2001年に博士学位論文を提出しまして、それをもとに2003年に出したのが『日韓交渉—請求権問題の研究』(2003)という本でした。

(2) 東西冷戦の「終焉」、戦後補償運動の本格化

社会主義への憧憬と動揺、自主ゼミ、デモ参加、打ち上げでの議論

さきほど、1980年代の後半は民主化が世界的に連鎖していく時代だと言いましたが、その結果、東西冷戦が終焉、崩壊することになります。

これは、1991年11月に姜萬吉ゼミでソウルの北側にある北漢山に登山したときの写真

ですが、大学院の友人たちの多くは社会主義に憧れていました。韓国の民主化を達成して、ゆくゆくは韓国独自の社会主義的な社会をつかっていき、そして同じ社会主義路線をとる朝鮮民主主義人民共和国と統一していくんだ、というような夢を語っていました。社会主義的な社会の実現方法や南北統一の方法をめぐる議論や対立はあったのですが、おしなべて社会主義への憧れがあったようです。



学生たち自身が運営する自主ゼミがありました。基礎勉強（理論）ゼミ、運動史ゼミ、経済史ゼミの三つでした。基礎理論ゼミでは、歴史理論や社会主義論、たとえば、マルクスの『資本論』や『共産党宣言』、レーニンの『なにをなすべきか？』、『帝国主義論』などの著作がテキストとして読まれました。以前はそうした文献は日本語や英語でしか読めなかったが、やっと韓国語の翻訳で読めるようになったということで、みんな一生懸命読んでいました。

運動史ゼミや経済史ゼミでは、朝鮮民族解放運動や民主化運動、朝鮮経済史に関連する最新の歴史研究を読んで議論する形で進められました。

高麗大学大学院では 1990 年代初めに大学院総学生会が組織され、それが中心になって大学院生たちもデモに参加していました。学生会の活動に熱心だったのは史学科や政治学科、国文学科の大学院生たちで、ソウル市内で大規模なデモがある日は、学生会で隊列を組んで市内中心部に出かけていくのです。もちろん私もそれについて行きました。デモの前線では学部の学生たちが火炎瓶を投げたり投石したりしていて、大学院生は後方でスローガンを叫び応援します。警察は、ペPPERフォグ、催涙弾ですね、もうどんどん打ってきて、目はあけられず、息もできないほどでした。

デモが終わったあと、簡単な総括会議をして、すぐに飲み屋に行って打ち上げが始まります。友人たちは、民衆歌謡を歌い、踊り、歴史研究や民主化後の行方、社会主義と民主主義、人生観、音楽、恋愛などについて、一晩中熱く語っていました。もちろん私もその中にいました。

ベルリンの壁崩壊(1989. 11)、ソ連崩壊 (1991. 12)

私が留学した直後の 1989 年 11 月にはベルリンの壁が崩壊し、その 2 年後の 1991 年 12 月には、ペレストロイカを進めていたゴルバチョフが大統領を辞任し、ソ連は崩壊します。東欧の民主革命とともに、いわゆる冷戦が終焉していく過程でした。

社会主義に憧れを抱いていた大学院の友人たちはこの事態をどう見ていたのでしょうか。ベルリンの壁崩壊については、朝鮮半島の南北分断体制も終わるのではないかと、統一も近未来に実現できるのではないかとという期待感をもっていたようです。

ところが、東欧の社会主義国家やソ連の崩壊には大きな衝撃を受けたようです。社会主義が理想の世界だと思っていたのに、韓国で政治的な民主化が達成されて、ようやく社会主義について自由に語れるようになり、マルクスやレーニンなどの著作も韓国語で読めるようになったのに、目の前で社会主義国家が、がらがらと崩壊していく。この世界の現実をどう受けとめればよいのか、今後われわれはいかなる社会を理想として進んでいけばいいのか、と相当動揺していたようでした。

元日本軍「慰安婦」金学順さん、強制動員労働者らの裁判闘争

その一方で、東西冷戦の終焉後に、植民地支配戦争下の被害者たちが日本政府や加害企業に対して、その責任を追及し補償を求める声をあげ始めます。その代表的な人物が元日本軍慰安婦の金学順（キム・ハクスン）さんです。民主化の中で誕生した新聞『ハンギョ

今日の日本政府は、朝鮮植民地支配と労働動員は「合法」だとし、強制動員と強制労働の事実を認めていません。2021年に菅内閣は、「強制連行」や「強制動員」は不適切だと閣議決定するという状況です。今年2月には、群馬の県立公園「群馬の森」にあった朝鮮人追悼碑「記憶 反省 そして友好」が群馬県によって強制撤去されるということがありました。

1990年代初めには、「強制連行を若者とたどる旅」のような企画が日本の市民運動として各地で実践されていたのですが、今日の状況はずいぶん変わってしまいました。

日韓民衆連帯運動（京都・ソウル、1991～95?）

最後にもう一つ紹介します。1990年代初め、京都とソウルの間で、労働・公害追放・貧民・生協運動にかかわる団体や人々が相互に交流する運動が進められました。私は91年から95年くらいまで、韓国での交流の通訳としてかかわったと記憶しています。京都は日韓民衆連帯京都連絡会議、ソウルはカトリック労働司牧委員会が窓口となっていました。これは、1991年5月に京都で開催された日韓民衆連帯京都連絡会議主催の「渡韓団報告集会」のチラシです。



日韓民衆連帯京都連絡会議が開催した渡韓団報告集会(1991.5)

おわりに—平和で友好的な日本と朝鮮半島、東アジアとの関係を築くために

私の1980年代、90年代の自分史を振り返ってみますと、在日朝鮮人、韓国の人たち、日本の友人たちとの関係性が大切だったと思います。その関係性は、多くの友人たちに助けってもらったり、一緒に働いたり、あるいは繋がりを持ったりしつつも、その繋がりが十分に維持できなかつたり、発展させていけなかつたりするという不十分さや反省がともなうものでした。今後も、友人たちとの関係性を大切にしていきたいと思っています。

二つ目に、自分史の暫定的な到達点ですが、平和で友好的な日本と朝鮮半島、あるいは日本と東アジアとの関係を築くためには、植民地支配・戦争被害の歴史に向き合っていく必要があるということです。具体的には「過去の克服」をし続けるということです。

「過去の克服」は、ナチの暴力に対する戦後ドイツの人たちの取り組みの総称として始まるのですが、南米の人権擁護運動、南アフリカのアパルトヘイトに対する真実和解委員会の運動、韓国での国家暴力への真実究明運動など、世界の人々の努力によって深められてきた概念だと私は考えています。

その指標として以下の5つがあげられます。①真実究明が最も重要です。それにもとづいて、②被害者は責任追求を行い、加害者はそれに応答する必要があります。そのうえで、③謝罪と名誉回復、④金銭的な賠償、ないしは補償を行います。最後に、過去の暴力が二度と繰り返されないように、⑤追悼や教育などによって歴史記憶を継承していくということです。これからも、この「過去の克服」を考え続け、実践していくことが大切で、そこから朝鮮半島や東アジアとの新たな関係性が、未来が始まっていくのではないかと、それが現在の私の暫定的な到達点ということになります。

少し長くなりましたが、これで私の話を終えたいと思います。どうもありがとうございました。

司会：ありがとうございました。先生の個人史の中にも私たちが知らないいろんな歴史を学ぶようなお話もありまして、非常に有意義な時間になったのではないかと考えております。ありがとうございました。

第17回 平和のための戦争と平和写真展 2024

「沖縄・フクシマ・東アジア」

月日：2024年8月10（土）～11日（日）

場所：カトリック河原町教会ヴィリオンホール

報告 河原田 眞弓

京都教区カトリック正義と平和協議会主催による戦争と平和写真展が、今年も8月10日（土）・11日（日）にカトリック河原町教会地下ヴィリオンホールにて開催。2日間で延べ100名以上の来場者を得た。

今回の展示は、第二次大戦中の東アジア（中国・朝鮮半島）、沖縄、福島がテーマ。

東アジア・沖縄の写真

中国・朝鮮半島の写真には、戦前の日本メディアが報じた写真とニュースが展示された。目をそむけたいような、日本兵の現地での残酷な光景をカメラにとらえ、報道することができたのも、「お国のために」という教育があったからだろうか。戦争状態になったときの、集団としての「正義」の暴走に怖さを感じる。

沖縄の写真には、沖縄本島の辺野古の現在の様子の他、与那国・石垣・宮古・奄美など南西諸島の現状が新たに追加された。米軍基地の存在が問題になってきた沖縄本島よりもずっと小さい島々である。近年「台湾有事」対策として、南西諸島の基地・要塞化が進んでいる。観光地や住宅地のすぐ隣に自衛隊の弾薬庫やミサイル発射基地が立ち並ぶ異様な光景。



この小さな島々の狭い土地で、弾薬庫が誤って爆発したらどうなる!? 島民は島に住み続けることができるのか? 戦争となったら、島民や観光客が避難できる場所は?? そんなことを考えさせられた。



福島の写真に米軍兵士の理由



世の国際ジャーナリストであるエイミー・ツジモトさんの講演を通して、実情を詳しくうかがい知ることができた。

2011年3月、エイミーさんの教員時代の教え子から届いた短いビデオ。ビデオには、福島の被災者へ救援物資を届け、兵士が原子力空母ロナルド・レーガンに戻った途端、鳴りやまなくなったガイガーカウンターの音。



病院では原因不明のまま。軍を除隊し、民間病院で診てもらって初めて体調不良の原因が放射能汚染であると診断されました。死者も20人を超えました」。

未曾有の災害を目の当たりにし、福島の人々の支援のために何のためらいもなく身を挺して働いた米軍兵士たち。テレビや新聞で彼らの働きに対する感謝と称賛が述べられていたことを思い出す。

フクシマの被曝者

この作戦に参加し、体調を崩した兵士たちは、「自分たちですら被曝して苦しんでいる。フクシマにも被曝者はもっているはず。せめて自分たちが声を上げることによって、東日本大震災による全ての被曝者が医療援助を受ける道を開きたい」と2012年末に東京電力を相手に裁判を起こす。その後アメリカ政府は、作戦に参加した兵士たちの被曝の事実を認めるが、何の補償もない。その話を聞いた小泉元首相が、日本のために働いてくれた兵士たちがそのような状況に置かれているとは

福島の写真には、若き米軍兵士たちの姿が加わった。何故「米軍兵士？」と思われる方も多いと思う。

東日本大震災の直後、被災した人を助けるといふ緊急の使命をおび、「トモダチ作戦」として、いち早く福島へ救援物資を運び続けた兵士たちの多くが、救援活動中に被曝し、その後母国に帰って体調を崩し、日米両政府いずれからも何の支援も受けることなく、一人また一人と亡くなっているのだ。

今回の映画「悲しみの星条旗」上映と、日系4

世の国際ジャーナリストであるエイミー・ツジモトさんの講演を通して、実情を詳しくう

が、実情を詳しくう

「福島第一原発から発せられた放射性物質が風に乗って海に向かった直後、空母ロナルド・レーガンはその真っ只中を航行し被曝。艦内にあった非常用食料やペットボトルの水は全て救援物資として被災地へ届けたため、艦内で飲む水や食事、シャワーは放射能に汚染された海洋水を浄化したもののみ。安全な水の無い中、作戦が終わるまでの1か月もの間、兵士たちはその環境下で生活を続けたのです。その後、国に帰還した兵士たちが次々に体調不良を訴えるも、軍の



申し訳ないと、兵士たちの医療支援基金を設立し、エイミーさんとともに支援を始めたという。しかし、東京電力からの謝罪や医療支援は未だない。

エイミーさんのお母様は、広島で原爆の被害にあった。お母様の苦しみを目の当たりにしてきたエイミーさんは被爆二世として「被曝者を世界中から出さない」ことを切に願っている。

これ以上被曝者を増やさないために、「世代・イデオロギー・主義主張を超えて、それぞれの状況下で、自分の出来ることに取り組んで欲しい」というエイミーさんのことばが強く胸に響いた。



現地学習会

大阪コリアタウン歴史資料館と

カトリック生野教会を訪ねる

報告 佐藤 恵

2024年10月14日(祝・月)、秋晴れの中、貸し切りバスを利用して大阪コリアタウンに向かった。予定より少し早く到着したため、歴史資料館の開館までコリアタウンを散策した。キムチやチジミ、韓国の食材を並べる店、Kポップスターのグッズを販売する店などがひしめき合って並んでいる中、大勢の、おそらくあまり過去の歴史を知らない若者たちが買い物や食事を楽しんでいた。

館長の高正子(コ・チョンジャ)さんが説明してくださった。

大阪コリアタウン歴史資料館が作られた経緯

コリアタウン(生野区)はかつて「猪飼野(いかいの)」と呼ばれていた。元は、仁徳天皇治世の頃の古代日本において、朝鮮半島(百済)から渡来してきた人たちが居を構えたところ。天皇に献上する猪(豚)を飼っていたことによりこの地名がついた。



日本が朝鮮半島を植民地化していた1920年代

(1910年=韓国併合)、虐げられ困難な生活を余儀なくされていた人たちが、主に済州島から生活の糧を求めて、もともと所縁があり産業があるこの地へわたって住みついていた。宛先を「日本国猪飼野」と書いてだけで済州島からの郵便物が届いたという。

1920年代は仕事を求めて男性が多く渡って来ていたが、30年代になると女性も増え、この地で結婚して子どもを持つようになり、世代をまたいで暮らすようになった。家庭を持つと祖先祭祀を行うようになり、その時に欠かせない食材を求める人たちで、当時路地裏にあった朝鮮市場が大変にぎわうようになった。現在のメイン通りには公設市場も開設されていたが、戦争の終結によって解散。再度、メイン通りの中ほどに店が出たが、世代が替わり祖先祭祀も縮小され朝鮮市場も衰退。日本の商店主も一緒に再興を検討する中で「チャイナタウン」のような構想が生まれ、「朝鮮市場」という名称を「コリアタウン」とすることで、厳しい差別意識から逃れられないかと考えた。

転機は 84 年。ロス五輪でキムチが選手に提供され好評、そこから朝鮮半島の食文化が広がっていった。1993 年地域の活性化が施策化され、コリアタウン構想が採択された。その後の韓流ブームも追い風になり、今や年間 200 万の観光客が訪れる一大観光地となった。

単なる観光地ではなく、コリアタウンができた歴史的な経緯も知ってもらいたいという願いから、2023 年 4 月 29 日、大阪コリアタウン歴史資料館が開設された。差別がなくなったわけではないため、将来にわたって継続した支援を得られる確証がないことから、公的機関には頼らずに賛同者の寄付によって作られた。

資料館の展示内容

展示の特徴として、在日コリアンの知識がない人でも理解しやすいように、差別や植民地化といった、民族にとってのつらい過去を起点として現在へと提示するのではなく、一定関係が落ち着いている現在から、過去へとさかのぼる形を取っているとのこと。以下、主な展示の説明。

○在日コリアンの渡航地のシンボルとしての「猪飼野」という地名がなくなったのは 1970 年。鶴橋、桃谷と改められた。地名を消すことで在日コリアンという存在を無くす意図を持った政策。

○戦後はハップサンダル製造が盛況を極めたが、職に就けない在日コリアンたちの貴重な家内産業で成り立っていた。



○2022 年、初めて、祭りの山車の上に在日の人が乗ることができた。

現在コリアタウンがある生野区は、在日の方たちだけではなくマイノリティも大勢おられる。障がい者施設や高齢者施設、作業所なども多い。また物価も安い。(つまり経済的に貧しい方でも暮らしやすい) 昔、生野区の 22 パーセントは韓国人だったが、今は韓国人だけでなく、ベトナム、中国、台湾の方たちもおられる。私たちはダイバーシティの街を目指す。だからと

言って外国人差別がない訳ではないが、ありのままの自分で生きていける社会でありたいし、その成功モデルとしてこの資料館を提示していると締めくくられた。

カトリック生野教会訪問

生野教会へ移動。政治犯救済の署名活動で正平協とも接点がある李哲(イ・チョル)さんが同席し、簡単な自己紹介をしてくださった。



1948年熊本県生まれ。東京の大学へ進学し祖国の歴史や言葉を学ぶサークルに参加。母国の言葉に直に触れたいと思い、韓国へ渡って大学院生となる。自由な思想をアカ（共産主義）とみなした当時の軍事政権によって北のスパイに仕立て上げられ投獄、死刑判決を受ける。13年の獄中生活を経て建国記念に当たる特別な祝いの恩赦で出所。日本に戻るからには、生まれ育った熊本ではなく、韓国人としてみなされた同様の立場の人たちと共闘する運動を続けておられる。励ましてくださった司教さんから、あなたはキリストと同じ国家反逆罪で捕らえられたといわれたとき勇気がわいたとおっしゃっていた。（著書に『長東日誌』がある）

学習会を終えて

現在、一大観光地として賑わいを見せているコリアタウン。歴史資料館は、差別の歴史による負の感情にとらわれるのではなく、日本と韓国の良好な関係が今後長く続くようにと意図された展示であった。韓流スターの美しさや食事のおいしさでつながる関係は本当に強固なものだろうか。そのうわべの装飾がなくなったとき、性懲りもなく朝鮮半島の人々に対する差別があらわになるのではないかと懸念される。



李哲さんは、出所された後の住処に生野を選ばれた。私たちが歓迎してくださった信徒の方々、担当司祭さん、また、暑さ厳しい日に下見に行ったとき、時間が行違っただけで待つ間を、急遽祈りの活動をされている涼しい部屋に通してくださった信徒の方々を思い出すとき、初めて行ってもここで暮らしてもいいと思わせる懐の深さ、人々の温かさが生野にはあると感じる。こ

こで生きてきた人たちが被った差別の激しさ、その時の悔しさ、真実の生き様を知ることと同じ痛みを感じる生活者としてつながることが、共に生きるゆるぎない関係になるのではないかと思う。

☆参加者の声

- ・李さんのお話を直接伺えて良かった。カトリックの話も出来てキリスト教としてのフィールドワークに来た意味があった。
- ・いつも知らないことを、深く学べて感謝です。
- ・素晴らしい体験学習でした。コリアタウンの雰囲気は活気もあり楽しかった。館長さんの説明も心に響きました。
- ・資料館コリアタウンのありようについて、まだまだ知るべきことはあると気づかされた。謙虚に歴史に学ぶことを心掛けたい。

映画会

X年後 I・II・III

正平協企画の映画会「X年後」

2024年の正平協の活動は例年に比べて密度の濃いものであった。いつもは春秋の学習会、8月の戦争と平和写真展に、「てくてく」の発行でもてこまいしているのだが、今年は、映画「放射線を浴びたX年後」の3回のシリーズ上映が加わった。1回目「あの日、日本列島は『死の灰』で覆われていた!」、2回目「思いは風化しない」に続く今回の最終上映は「京都教区いのち・平和・環境のつどい」として開催された。題して「サイレント・フォールアウト—乳歯が語る大陸汚染—」

「放射線を浴びたX年後」IとII

日本は1945年8月、広島と長崎の原爆投下ゆえに、戦争における核使用による放射線被曝及び被曝の問題を知ってはいるものの、戦後頻繁に実施された太平洋上における核実験による漁師たちの被曝やその家族の苦悩については、第五福竜丸などわずかな事件についてしか知らされていないか、当時多くの報道があったにもかかわらず、たいていのことが忘れ去られていたのだろう。そういった社会的な記憶を呼び覚ましてくれるのが「放射線を浴びたX年後」シリーズIとIIであった。

1月27日 放射線を浴びたX年後 参加者35名

あの日、日本列島は「死の灰」で覆われていた!

1954年、南の島で水爆実験がおこなわれた。被曝マグロは廃棄され、漁師たちは病に倒れた。その後、200万ドルと引き換えに、すべての魚が日本の食卓にあがった!

「セシウム、機密文書、もろく砕けた人骨・・・」見えてきたのは、X年後の驚くべき実態だった。

7月20日 放射線を浴びたX年後II 参加者34名 川口美砂さん来場

思いは 風化しない

36歳の若さで亡くなった父

半世紀前、太平洋核実験を目撃した海の男たち—

彼らは被ばく者だったのか?

「私の父は、何故死んだのか?」

半世紀前の太平洋核実験、室戸の漁師たちが伝える無言のメッセージとは—?

「いのち・平和・環境の日のつどい」 放射線を浴びたX年後は続く

2024年11月16日 参加者40名

伊東英朗監督の講演

サイレントフォールアウト—乳歯が語る大陸汚染—

日本人監督が、アメリカ国民に突きつける

アメリカ大陸全土の放射能汚染



X年後Ⅲ「サイレント・フォールアウト」

そして今回の「サイレント・フォールアウト」は日本に原爆を投下したアメリカに視点が移る。実際監督の伊東英朗さんはこの作品をアメリカでの上映を前提に制作している。

太平洋上だけではなくアメリカ本土でも核実験が度々行われた。太平洋上の実験結果から、放射線が広範囲に広がっていくことはすでに分かっていた。にもかかわらずアメリカ本土でも実験が繰り返されたのだ。核実験というけれど、それはまぎれもなく核兵器の開発である。それが妨げられるような不都合な事実は当局によって隠されるのが常套である。撮影はインタビューを軸に展開していく。

核実験と放射線汚染による健康被害

ソルトレイクシティでのインタビューでは、幼い頃から癌で亡くなっていく家族や友人を見てきた女性が登場する。涙ながらに語る女性の悲しみの理由は、単に故人との別れではなく、死の原因が放射線であることをなかなか認めてもらえない苦悩であった。当然であるが多くの被曝者が現れ、核実験による放射線被曝が原因であることをなんとか証明し世に訴えたいとの活動が始まる。事実を明らかにしようとする学者やジャーナリストの取組が少しずつ進んでいきアメリカにおける放射線汚染は明らかになっていく。

女性の行動が社会を変えた

そんな中でも女性たち、特に母親たちの活動が際立っていた。彼女らのアイデアによって、ストックされていた子どもの10万本を超える乳歯の放射線測定（気の遠くなる作業だったと思うが）が実施され、核実験と放射線汚染による健康被害の因果関係が決定的となり、当時のケネディ大統領が実験の中止を宣言するに至ったのだ。国家による核開発という大きな動きを平和や健康を求める動きへとシフトさせたのは女性たちの働きであった。女性の行動が社会を変え、健康と命を守ったのである。

放射線汚染は環境汚染の最たるもの

伊東監督のお話の中で印象的であり、はっとさせられたのは、まず、放射線汚染が環境汚染の最たるものだという点である。長期間にわたり環境に影響し続け、自然や生物にダメージをもたらすものは他にはないだろう。もう一つ、なるほどと思ったことがある。これは太平洋における核実験について、日本では今日まで語られなかったのはマスメディアがしっかりと報道しなかったからではないかという指摘に対して、いやいや忘れていただけだと言って当時の報道資料を映してくださったこと。わたしたちは自分に影響が直接及んでいないことについては容易く忘れてしまいがちなのだろう。正直、広島長崎の原爆については歴史的に伝えられたこととして自分事なのだが、その後の核実験や、まして原爆投下した国であるアメリカの被曝被害についてこれまでまるで関心はなかった。こういったドキュメンタリー映画に触れる機会がなければ一生知ることにはなかったと思う。それにしてもあとどれくらいすれば度重なる核実験の放射線の影響はなくなるのだろうか。まだX年後は終わっていない。ぜひ鑑賞してほしいと思う。

2024年度 京都都区
「いのち・平和・環境の日」の集い

放射線を浴びたX年後Ⅲ
サイレント
フォールアウト
SILENT FALLOUT
一乳歯が語る大げんか案

上映会 & トーク
ゲスト 伊東英朗 監督

11月16日(土) 上映会 14:00-15:20
トーク 15:30-16:30

河原町カトリック会館大ホール

入場無料 ※会場にて主催者の案内に従っていただきます。

観覧料：京都府立総合文化センター TEL 075-223-3340
(月・水 10:00-17:00)

主催：京カトリック協議会 協賛：いのち・平和・環境協議会

特別講演／写真・絵画展

未来の世代のために過去から学ぶ

11月3日（日） 13：00～17：00

4日（月） 11：00～17：00

ヴィリオンホール 参加者 70名

講演：エイミー・ツジモトさん（国際ジャーナリスト）

奥村 豊さん（京都教区司祭）

かつて日本に戦争がありました。少年少女たちも戦争準備に駆り出されました。

特に、悲惨だったのは世界で類を見ない残忍な「生体実験」を満州で現地の人々にやったことです。それは731部隊とされています。その、実験の手助けをさせられた多くの少年がいました。そして、日本国内でも瀬戸内海の小さな島で「毒ガス」を作った時にも少年や少女たちが駆り出されていました。



今でも世界で繰り返り広げられている戦闘によって、多くの子どもたちが犠牲になっています。

当時の少年・少女たちが残してくれた写真や絵画の記録を展示しました。



韓国カトリック正義具現全国司祭団（通称「司祭団」）

50 年記念シンポジウムに参加して

古屋敷 一葉（援助修道会）

去る 11 月 19 日、韓国ソウルの明洞聖堂コストホールにて、「司祭団」50 年記念シンポジウムが開催されました。「司祭団」が日本のカトリック教会と最も深い関係にあったのは、1970～80 年代です。「司祭団」は 1974 年にチハクスン司教拘束事件を受けて誕生しましたが、日本においては、チ司教の拘束を受けて、日本カトリック正義と平和協議会（以下「正平協」）が韓国における人権侵害に対する声明を發表しました。そして、韓国の朴正熙政権下で起きていることを国内や海外の正義と平和グループにも知らせる活動や、不当に拘束された人々の釈放を願うための、プロテスタント教会との合同祈禱会などが行なわれるようになりました。このような活動は、キムジハ救援、在日韓国人政治犯救援、東一紡績女子労働者支援、光州民主化闘争、キムデジュン救援、釜山アメリカ文化センター放火事件などに関係して行われました。「司祭団」と「正平協」の関わりについては、韓国の民主化運動に携わっていたキムジョンナムが当時「正平協」メンバーのソンヨンスンに送った文書を「正平協」が記者会見や発行した冊子において發表していることから読み取ることができます。

シンポジウム当日は、ソウル大司教区のハムセウン神父が「司祭団」前半 25 年の歴史を、チョンジュ教区のキムイングク神父が後半 25 年を振り返ってくださいました。人権擁護と国の民主化、そして南北分断体制の解体を願いながら、社会構造の中で貧しく、小さく、弱くされた人々とともに歩んできた歴史であったということです。それは時間があれば社会の中に出ていき、時には非難や攻撃を受け、教会の弱さを知り、どれほど人々の助けになるのかと自問することの繰り返しであったということでした。しかし、神が命じられるのであれば、自分たちは命じられるままに飛び、走るしかないと決意を述べられていました。

その後、私を含め 4 人がこれからの「司祭団」に対しての提言を發表しました。イエズス会のパクサンフン神父は、教会の権威主義、司祭中心主義が「司祭団」の活動の妨げになっていないか振り返る必要性を述べられました。ヤンウンギ修道士（韓国殉教福者聖職修道会）は「平信徒」という言葉を使うことへの疑問を投げかけ、この言葉を残したまま司祭と信徒が連帯できるのかどうかを問われました（平信徒という言葉が信徒を下に見ているという意味につながるということです）。また、緊張の高い現場に出ていく「司祭団」は今後数が少なくなっていく可能性があるが、痛みの現場とのつながりを持ち続けることによって、今後新たな動きがあるかもしれないと述べられました。ウリ神学研究所のイミヨン研究員はシノダリティの精神に触れながら、「司祭団」が若者を含めた信徒の養成に携わり、彼らの社会参加を支援してほしいとの要望を述べられました。

私は、日本の正義と平和協議会との関わりの歴史を振り返りながら、「司祭団」が投げかけた日本の植民地支配責任についての自己反省を正義と平和協議会が真摯に受け止めて活動してきたことを述べました。それがいわゆる教会の戦争責任告白（戦後 50 年にあたっての司教団メッセージや正義と平和協議会の声明）にも繋がったと考えられますが、植民地支配とそれを支える当時の教会の教えが信徒の生活にどのような影響を与えたのかについて掘り起こすことが、歴史を振り返る課題として残っているように思われるということをお伝えしました。

その後の質疑応答なども含めて気づいたことは、最近社会司教委員会から出された冊子『すべてのいのちを守る教会をめざして-ハンセン病問題 過ちを繰り返さないために』に書かれている一言と共通するところがあるように思われました。

宗教者と入所者が『救うもの』と『救われるもの』という関係を翻し、ともに人間を非人間化するものから解放されていくという対等な関係を紡いでいく」（52 頁）。

「司祭団」にせよ正義と平和協議会にせよ、社会の中で人権侵害を受けている人を助けよう、連帯しようとして活動してきたわけですが、自分が『救うもの』つまり上に立つもの、何かを与える立場にあるという意識を持つと、自分も『救われるもの』であることを忘れがちになりがちです。ともに歩むことによって教えられることを大切に振り返り、過ちを認め、謙虚に、また気づきに対して感謝を持って生きる。当たり前のことですが、それを忘れないようにしたいと思います。

カトリック大阪高松教会管区部落差別人権活動センターの行事案内

2月24日 対話集会 ウトロで終わらないウトロの話

～差別と分断を乗り越えた力～

発題者：金秀煥（キム・スファン）さん（ウトロ平和祈念館副館長）

場 所：サクラファミリア（カトリック大阪梅田教会）

7月21日 部落差別が生んだ狭山事件（仮題）

講師：黒川みどりさん（日本近現代史、静岡大学名誉教授）

場所：サクラファミリア（カトリック大阪梅田教会）

9月23日 シンポジウム

シンポジスト：中村一成さん（フリージャーナリスト、元毎日新聞社 記者）

岡 真理さん（日本のアラブ文学者、思想学者。専門は現代アラブ文学、第三世界フェミニズム思想。早稲田大学文学
学術院文化構想学部教授、京都大学名誉教授）

場所：サクラファミリア（カトリック大阪梅田教会）

正義と平和協議会 2025 年度の予定

2月11日（火・祝） 対談講演会

満州分村移民と部落差別熊本「来民開拓団」の悲劇

被差別部落の融和事業、農村の満州開拓移民事業の国策が重なった形で、大陸に送り出された「来民開拓団」。敗戦とともに原住民の襲撃にあい、多くの子どもを含む276人全員（1人だけ証言のため脱出）が自決するに至った全容を、歴史的背景から当事者の証言、資料を丹念に積み重ね、現在までを追い、悲劇の遠因としての国策を厳しく断罪。

ソ連兵への「性接待」で知られている黒川開拓団との関係など貴重な史実をもとに松浦司教さんとエイミー・ツジモトさんにお話をして頂きます。

対談： 松浦 悟郎さん（名古屋教区司教）

エイミー・ツジモトさん（国際ジャーナリスト）

河原町カトリック会館 地下2F 大ホール 14：00～

カトリック大阪高松教会管区部落差別人権活動センターと共催

5月24日（土） 学習会

『台湾と沖縄 帝国の狭間からの問い』

講師：駒込 武さん

京都大学大学院教育学研究科教授

専門は日本の植民地教育史と台湾近現代史

場所：河原町カトリック会館 地下2F 大ホール

8月9日（土）～10日（日） 戦争と平和写真展

—「沖縄・フクシマ・加害の歴史」—

場所：カトリック河原町教会ヴィリオンホール

11月24日（月・振休） 現地学習会

渡来人歴史館（大津駅徒歩6分）とカトリック大津教会訪問